

第5-4号

# 耕人

『耕人塾』

塾長 木村 民男

平成28年9月17日(土)

## 「文・武・楽三道」について

『耕人塾』の指導指針の一つに、『文・武・楽三道（学問・武道・スポーツや趣味）』の講話や体験を通して、「人間的な幅と深さを身に付ける」があります。開塾式の時にその意味するところの概要をお話ししましたが、今回は「文・武・楽三道」について、新聞記事から考えてみたいと思います。初めに、平成28年9月8日（木）の河北新報「声の交差点」に載った「三宅選手の振る舞い感動」（坂本昭憲さん、72歳、仙台市）の文章（要約）を読んでみてください。

リオデジャネイロ五輪を見ながら、半世紀前の東京五輪の柔道無差別級決勝を思い出した。/優勝したオランダのヘーシンク選手の関係者が喜んで試合場の畳に上がろうとして、ヘーシンク選手に入るなど押し返された。神聖な場所に選手以外は入るなど。/今回のリオ五輪では、レスリング、パドミントンで日本の監督、コーチが試合場になだれ込んだのをテレビで見た。神聖な試合場を何と思っているのか。/また、近頃の選手は、これ見よがしのガッツポーズや雄たけびが多くなった。/今回の五輪で感動したのは重量挙げ女子48<sup>キ</sup>級の三宅宏実選手だ。控えめな態度で試技場に入り、満身創痍（まんしんそうい）でありながら、堂々の銅メダルを獲得した。派手なガッツポーズもなく、長年お世話になったバーベルに触れ感謝の意を表した。/そのすがすがしさは、ベストスポーツウーマン賞ものだと思う。

東京五輪柔道無差別級決勝において、日本の神永に抑え込みで勝った瞬間のヘーシンクが、試合場に上がろうとする同国の人を手で制した映像は私も見ました。また、三宅選手が三度目の試技で銅メダルが確定した瞬間の映像も見ました。坂本さんと同じように私も感動しました。しかし、全てのスポーツにそのような態度を求めることは良いことなのだろうかと思っています。

平成25年の「耕人2号」に「文・武・楽(らく)三道」について、次のように書いています。

「文武両道」という言葉があります。昔は、「文」は学問、「武」は「武道」だったのですが、今は「武」は武道を含めたスポーツ全般ととらえられています。しかし、精神を鍛えることを主とする「武」と楽しさやレクリエーション的要素が強いスポーツや趣味の「楽」を分けた方が良いと思っています。「楽」とは、心身の躍動や喜怒哀楽の素直な表現、生活の中での楽しさや潤いの追究です。スポーツの中には武道的要素を取り入れている種目もありますが、「文・武・楽」三道の視点からとらえるとすっきりします。そして、この三つは「人間力」にとって、どれも大切なものであり、身に付ける努力をすることが必要だと考えています。

「武」においては、勝敗後の姿や態度の抑制が要求されますが、「楽」の一つであるスポーツにおいては、相手を敬う心や礼儀作法などをわきまえた上で、心身の躍動や喜怒哀楽の素直な表現があってもいいと考えています。問題なのは、派手なパフォーマンスや過激な表現だけがよいとする風潮です。だからこそ、「文・武・楽三道」のバランスが大切なのだと考えています。

## 「夢追いかけ『キセキ』実現」

嶋津ひなたさん（12歳）の文章を紹介します。「私はミヤギテレビの番組『OH!バンデス』のファンで、鈴木沙喜代アナにあこがれてアナウンサーをめざしています。私は、沙喜代アナに私の学校に来てほしいと手紙を出しました。何とそれが実現しました。沙喜代アナが突然私のクラスに来て、テレビ紹介系の活動を一緒にやってくれました。私はこの経験からアナウンサーになりたいという思いをますます強くし、夢を追いかけています。そんな私には、目にする物すべてが輝いて見えます。夢やあこがれをもって行動に出ると、思いもしない出来事『キセキ』に出会うことがあります。夢を持つこと、夢をかなえるために今できる行動を起こすことが、キセキにつながると思います。」将来への夢をもっているひなたさんはとても輝いて見えますね。